県道稲童新田原停車場線関係埋蔵文化財発掘調査報告 1

# 稲　童　三　田　遺　跡

行橋市文化財調査報告書　第 56 集

2015

行橋市教育委員会

# 序

本書は、平成 25 年度に県道稲童新田原停車場線の工事に先立ち実施しました、稲童三田遺跡の発掘調査の報告書です。

遺跡の所在する稲童地区は京都平野南東部の低台地上にあたり、近辺には、稲童古墳群や稲童 1 号掩体壕など多くの遺跡が知られています。今回の調査では近世を中心とする遺構、遺物を確認しましたが、この成果は当地周辺の地域史の解明に寄与する重要な成果と思われます。本書が学術研究はもとより埋蔵文化財への理解と認識を深めるために、広く活用されることを願います。

なお、発掘調査および報告書作成に当たって御協力いただいた、福岡県京築県土整備事務所、福岡県教育委員会、地元稲童上区の方々をはじめとする関係各位に深く感謝いたします。

平成 27 年 3 月

行橋市教育委員会
教育長職務代理者
教育部長　坪根 義光

# 例　言

1．　本書は、福岡県行橋市大字稲童 3061－2 ほかに所在する稲童三田遺跡の発掘調査報告書である。
県道稲童新田原停車場線の工事に伴い、県の受託金を受け、平成 24 年度に発掘調査を実施した。

2．　調査および報告書作成は、行橋市教育委員会が主体となって行った。
調査組織は第 1 章第 2 節に記す。

3．　遺構の実測は中島裕子、古木初子、山口裕平が行った。

4．　遺構写真は山口が撮影した。

5．　遺構図の整理は松尾留衣、山口が行った。

6．　遺物の接合・復元は枝吉恵美、佐々木豊子が行った。

7．　遺物の実測は定野美津子、山口が行った。

8．　遺物写真は山口が撮影した。

9．　遺構・遺物図面の浄書は松尾、松本まゆみが行った。

10．本書に使用した遺構の略号は SD（溝）である。

11．本書に使用した方位は、世界測地系に基づく座標北である。

12．報告した遺物、図面、写真は行橋市教育委員会において保管している。

13．本書の執筆および編集は、山口が行った。

# 本 文 目 次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査の経緯と経過 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　稲童三田遺跡 …… 5
第４章　結語 …… 9

# 図 版 目 次

図　版　1　　稲童三田遺跡の位置
図　版　2　　１．Ⅰ区全景（西から）
　　２．Ⅰ区全景（東から）
　　３．Ⅰ区南側（北東から）
図　版　3　　１．Ⅰ区東側（西から）
　　２．Ⅱ区全景（西から）
　　３．Ⅱ区西側（南東から）
図　版　4　　稲童三田遺跡出土遺物

# 挿 図 目 次

第　1　図　　稲童三田遺跡調査区域（1/5,000）
第　2　図　　稲童三田遺跡の位置（1/2,000,000）
第　3　図　　京都平野の主要遺跡分布図（1/80,000）
第　4　図　　発掘調査の様子
第　5　図　　稲童三田遺跡遺構配置図（1/200）
第　6　図　　稲童三田遺跡出土遺物実測図（1/3・1/2）

# 表　目　次

表　　1　　稲童三田遺跡出土遺物観察表

# 第１章　調査の経緯と経過

## 第１節　調査の経緯と経過

県道稲童新田原停車場線（福岡県道 244 号）は、行橋市道場寺から同稲童までを結ぶ、全長 2319m の一般県道である。国道 10 号から分岐する新田原駅前を起点とし、稲童地区を東西に走り、稲童漁港付近で終点となるこの県道は、行橋市南東部の新田原地区に密着した生活道路であるが、道路の幅員は狭く、十分な歩道も確保されていないため、沿線にある仲津小学校、仲津中学校へ通う小・中学校生らの登下校路としてははなはだ危険な状態下にあった。

このため、福岡県京築県土整備事務所は、新田原駅前から仲津中学校付近までの約 1.1km に対し、車道拡幅と歩道の新設を事業化（一般県道稲童新田原停車場線歩道設置工事）し、平成 24 年 5 月に行橋市教育委員会に対し、埋蔵文化財の有無の照会を行った。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地では無かったものの段丘上に遺跡の存在が想定されたため、平成 24 年 9 月 12 日に工事予定地点の計 6 ヶ所で試掘調査を行った。その結果、行橋市大字稲童 3061－2 番地に設置した試掘坑で溝などの遺構を確認した。このため小字名より稲童三田遺跡（遺跡番号 14049051）と名付け、福岡県教育委員会に対し試掘調査の結果報告を行い、周知の埋蔵文化財包蔵地として新規の決定を受けた。このことから福岡県京築県土整備事務所と行橋市教育委員会の間で稲童三田遺跡の発掘調査に関する協議を行い、翌平成 25 年度内に行橋市教育委員会が主体となり発掘調査を行う運びとなった。

調査は平成 25 年 8 月 23 日から同 10 月 3 日まで、実数 22 日間をかけて行った。調査面積は約 250㎡で、調査体制は次節に示す通りである。

## 第２節　調査体制

**現地調査（平成 25 年度）**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 総　括 | 行橋市教育委員会 | 教育長 | 山田 英俊 |
| | | 教育部長 | 三角 正純 |
| 調　査 | | 教育部 文化課長兼文化財保護係長 | 小川 秀樹 |
| | | 教育部 文化課 文化財保護係 | 中原　博 |
| | | 教育部 文化課 文化財保護係 | 山口 裕平（調査担当） |
| | | 教育部 文化課 文化財保護係 | 中川 優子 |
| 庶　務 | | 教育部 文化課 文化振興係長 | 辛嶋 智恵子 |
| | | 教育部 文化課 文化振興係 | 田坂　彩 |

発掘調査作業員

赤波江静代　安藤 隆弘　生本 知子　大村 英幸　緒方 景俊　小野田トミヱ　小渕八寿子
佐野 夏子　中島 裕子　古木 初子　松尾 公子　山田 拓三　山本 要二　吉田 幸子

**報告書作成（平成 26 年度）**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 総　括 | 行橋市教育委員会 | 教育長 | 山田 英俊（～ 10 月 8 日） |
| | | 教育部長 | 灰田 利明（～ 9 月 30 日） |
| | | 教育部長 | 坪根 義光（10 月 1 日～） |
| 調　査 | | 教育部 文化課長 | 小川 秀樹（～ 9 月 30 日） |
| | | 教育部 文化課長 | 亀田 秀雄（10 月 1 日～） |
| | | 教育部 文化課 参事兼文化財保護係長 | 小川 秀樹（10 月 1 日～） |
| | | 教育部 文化課 文化財保護係長 | 辛嶋千恵子（～ 9 月 30 日） |
| | | 教育部 文化課 文化財保護係 | 中原　博 |

| | | |
|---|---|---|
| | 教育部 文化課 文化財保護係 | 山口 裕平　（報告書担当） |
| 庶　務 | 教育部 文化課 文化振興係長 | 髙尾信次郎 |
| | 教育部 文化課 文化振興係 | 森　雅代 |
| | 教育部 文化課 文化振興係 | 入生 佳奈 |
| | 教育部 文化課 文化振興係 | 田坂　彩 |

整理作業員

枝吉 恵美　奥野 康代　鎌田 尚子　佐々木豊子　定野美津子　松尾 留衣　松本まゆみ

## 第３節　調査の経過（日誌抄）

平成 25 年 8 月 23 日（金）【晴れのち雨】

西側の調査区（Ⅰ区）より表土剥ぎを開始する。

平成 25 年 8 月 26 日（月）【曇りのち晴れ】

Ⅰ区の表土剥ぎが終わる。

平成 25 年 8 月 27 日（火）【晴れ】

Ⅰ区の遺構検出を行う。遺構はほとんど無いようだ。

平成 25 年 8 月 28 日（水）【晴れ】

遺構検出を終え、写真を撮影する。杭打ち後、平板測量を行う。

平成 25 年 8 月 29 日（木）【曇り】

遺構の掘り下げを行い、その後、全景写真を撮影する。遺物の取り上げを行う。台風の接近に備えて現場を養生する。

平成 25 年 9 月 3 日（火）【雨】

追加の平板測量を行う。

平成 25 年 9 月 5 日（木）【晴れ】

Ⅰ区の埋め戻しを行う。

平成 25 年 9 月 6 日（金）【晴れ】

Ⅰ区の埋め戻しを終え、Ⅰ区の調査が完了する。引き続き、東側の調査区（Ⅱ区）の表土剥ぎに移る。

平成 25 年 9 月 9 日（月）【晴れ】

Ⅱ区の遺構検出を行う。

平成 25 年 9 月 10 日（火）【晴れ】

引き続きⅡ区の遺構検出を行う。東側は大きく撹乱を受けているようだ。

平成 25 年 9 月 18 日（水）【晴れ】

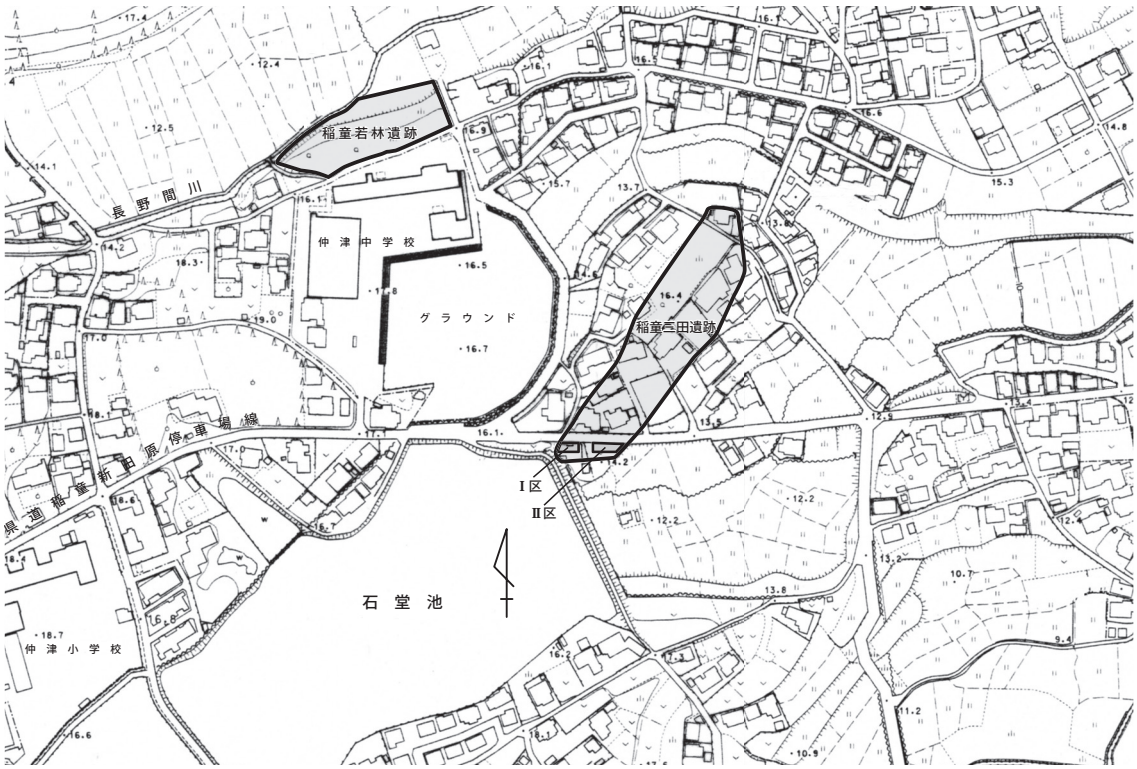
お盆休みを挟む。Ⅱ区の遺構検出を行う。

平成 25 年 9 月 26 日（木）【晴れ】

遺構の掘り下げを行う。その後、全景写真を撮影する。併行して杭打ちをし、平板測量を行う。

平成 25 年 10 月 3 日（木）【晴れ】

Ⅱ区の埋め戻しを行う。調査をすべて終了する。




**第１図　稲童三田遺跡調査区域**（1/5,000）

# 第２章　遺跡の位置と環境

## 第１節　地理的環境

福岡県行橋市は県北東部に所在する（第２図）。この地域は旧郡名の頭文字を取り京築地方と呼ばれ、行橋市はその中心都市で人口 72,833 人（平成 26 年 12 月末日現在）を擁す。市域は京都平野の中央部を占め、東に豊前海（広域には周防灘）を臨む。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳〔216m〕、御所ヶ岳〔ホトギ山：246.9m〕などが東西に連なり、みやこ町豊津・犀川地域と画す。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定特別天然記念物の平尾台カルストの石灰岩台地が広がる。他に観音山〔202m〕、幸ノ山〔178m〕、覗山〔121.7m〕など少数の独立山塊がある。市内には霊峰・英彦山を源とする今川、祓川をはじめ、小波瀬川、長峡川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、豊前海に注ぐ。

本書で報告する稲童三田遺跡は、覗山の南の海岸段丘、標高 14 m前後に所在する。

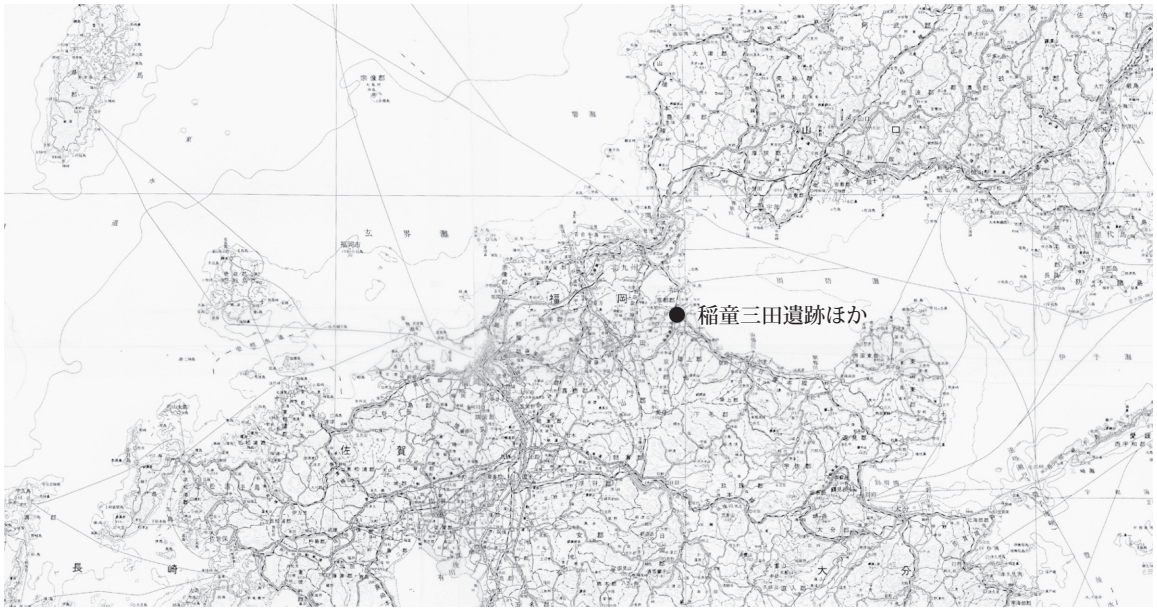
## 第２節　歴史的環境

京都平野における人類の痕跡は、今からおよそ３万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼり、市域では渡築紫遺跡 C 区で該期の石器および礫群が見つかっている。

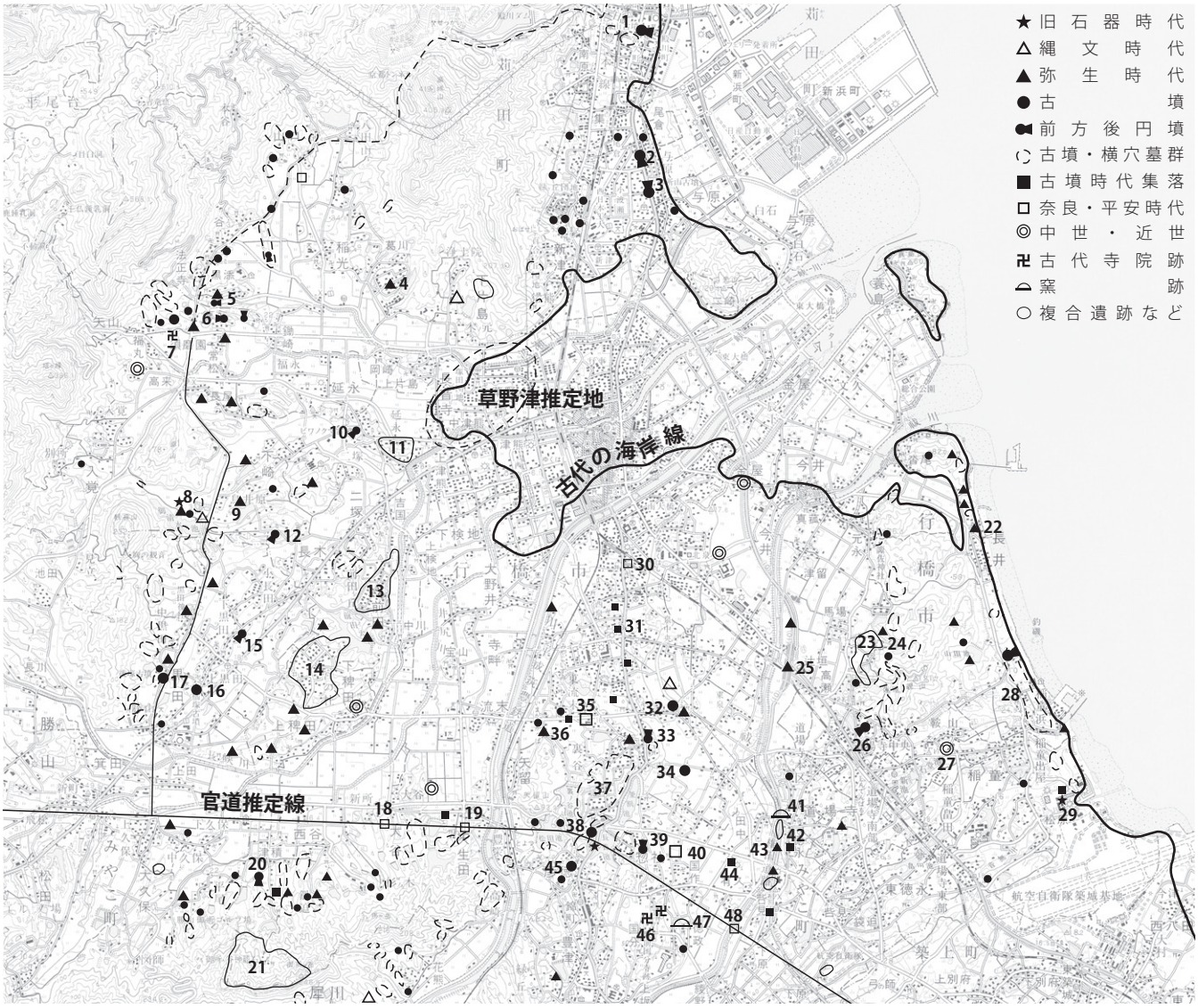
続く縄文時代は、全国的に温暖化の影響で海進が発達した。そのピークは約 4800 年前頃で、現在の延永―津熊―大橋―今井―津留を結ぶラインがその頃の汀線と考えられている。この汀線は弥生時代以降若干海退するものの、江戸時代以来の干拓によって、蓑島と陸続きになるまで、京都平野は現在とは大きく異なる内湾性の臨海平野を形成していた（第３図）。縄文時代の遺跡は、遺構は不明確ながら、早期の押型文土器や後期の西平式系土器など、各期の遺物が徐々に知られるようになって来た。

2500 年前頃を境に、生業の主体を狩猟採集とする縄文時代から稲作農耕とする弥生時代へと変化していく。この地域において遺跡が爆発的に増加するのは弥生前期後半からで、下稗田遺跡、前田山遺跡など大規模な集落が形成される。

３世紀後半頃に始まる古墳時代には九州で最大・最古級の畿内型前方後円墳である石塚山古墳が苅田町域に築かれ、その海浜部で前期から中期への首長墓系譜をたどることができる。後期には京都平野内陸部




**第２図　稲童三田遺跡の位置**（1/2,000,000）




1. 石塚山古墳　2. 番塚古墳　3. 御所山古墳　4. 葛川遺跡　5. 黒添メウト塚古墳　6. 徳永丸山古墳
7. 椿市廃寺　8. 入覚大原遺跡　9. 下崎丸山遺跡　10. ビワノクマ古墳　11. 延永ヤヨミ園遺跡　12. 八雷古墳
13. 前田山遺跡　14. 下稗田遺跡　15. 庄屋塚古墳　16. 橘塚古墳　17. 綾塚古墳　18. 大谷車堀遺跡
19. 天生田大池遺跡　20. 片峰1号墳　21. 御所ヶ谷神籠石　22. 長井遺跡　23. 代遺跡　24. 馬場代2号墳
25. 辻垣遺跡　26. 隼人塚古墳　27. **稲童三田遺跡**　28. 稲童古墳群　29. 渡築紫遺跡　30. 崎野遺跡
31. 福富小畑遺跡　32. 侍塚遺跡　33. ヒメコ塚古墳　34. 鬼熊遺跡　35. 福原長者原遺跡　36. 矢留堂ノ前遺跡
37. 竹並遺跡　38. 甲塚方墳　39. 惣社古墳　40. 豊前国府跡　41. 居屋敷窯跡　42. 鋤先遺跡
43. 徳永川ノ上遺跡　44. 京ヶ辻遺跡　45. 彦徳甲塚古墳　46. 豊前国分寺跡　47. 徳政瓦窯跡　48. 砦見樋ノ口遺跡

**第３図　京都平野の主要遺跡分布図**（1/80,000）

に移動し、市内では八雷古墳が６世紀前半の首長墓と考えられる。７世紀になると全国的に古墳築造も停止傾向にあり古墳時代の終末期に入るが、京都平野では古墳時代終末期になっても古墳築造が盛行する。市内では福丸古墳群、渡築紫古墳群などが調査されている。この時代は古代史の上では飛鳥時代であり、仏教文化が地方にも根付き始めた頃である。市内では福丸地区に椿市廃寺が建立された。またこの頃、対大陸・半島情勢の悪化に伴い、津積に古代山城である御所ヶ谷神籠石が築かれた。泉地区に所在する福原長者原遺跡は東西幅 150 mの区域をもつ８世紀前半の官衙遺跡で、奈良時代における豊前国府の可能性が指摘されている。

本書で報告する稲童三田遺跡は、近世以降の散布地である。

# 第３章　稲童三田遺跡

稲童三田遺跡は本事業に伴い新規に確認した遺跡である。今回の調査区は、発掘が歩道設置に起因することから東西方向に横長となり、排土置き場の関係より１回の反転を行いながら調査を進めた。西側の調査区をⅠ区、東側をⅡ区とし、その間（東西約 15m、南北約５m、面積約 80㎡）は人家の通用口となるため、発掘調査を行うことができなかった。調査区の行政地番は行橋市大字稲童 3061－2、3063－5 番地にあたる。調査面積は約 250㎡である。

調査の結果、今回の調査区は近世以降の散布地で、Ⅰ区とⅡ区の西側から小土坑や柱穴、溝などの遺構を僅かに検出した（第５図、図版２・３）。Ⅱ区の東側は大きく削平を受けており、遺構は残っていなかった。調査区の基本層序は上位より黒褐色土、黄褐色あるいは赤褐色を呈する風化火山灰層となる。遺構検出面（地山）は前述の黄褐色あるいは赤褐色風化火山灰層である。

以下では遺物の出土した遺構（溝）と採集遺物を本遺跡の調査成果として報告する。

**（１）溝**

Ⅱ区の西側（図版３－２）では、調査区を斜めに横切る並列した溝を数条検出した。いずれも幅 30cm 程の浅い溝で、上部は削平を受けているものと考えられる。そのうち、最も東の溝（SD001）と最も北の溝（SD002）より遺物が出土した。

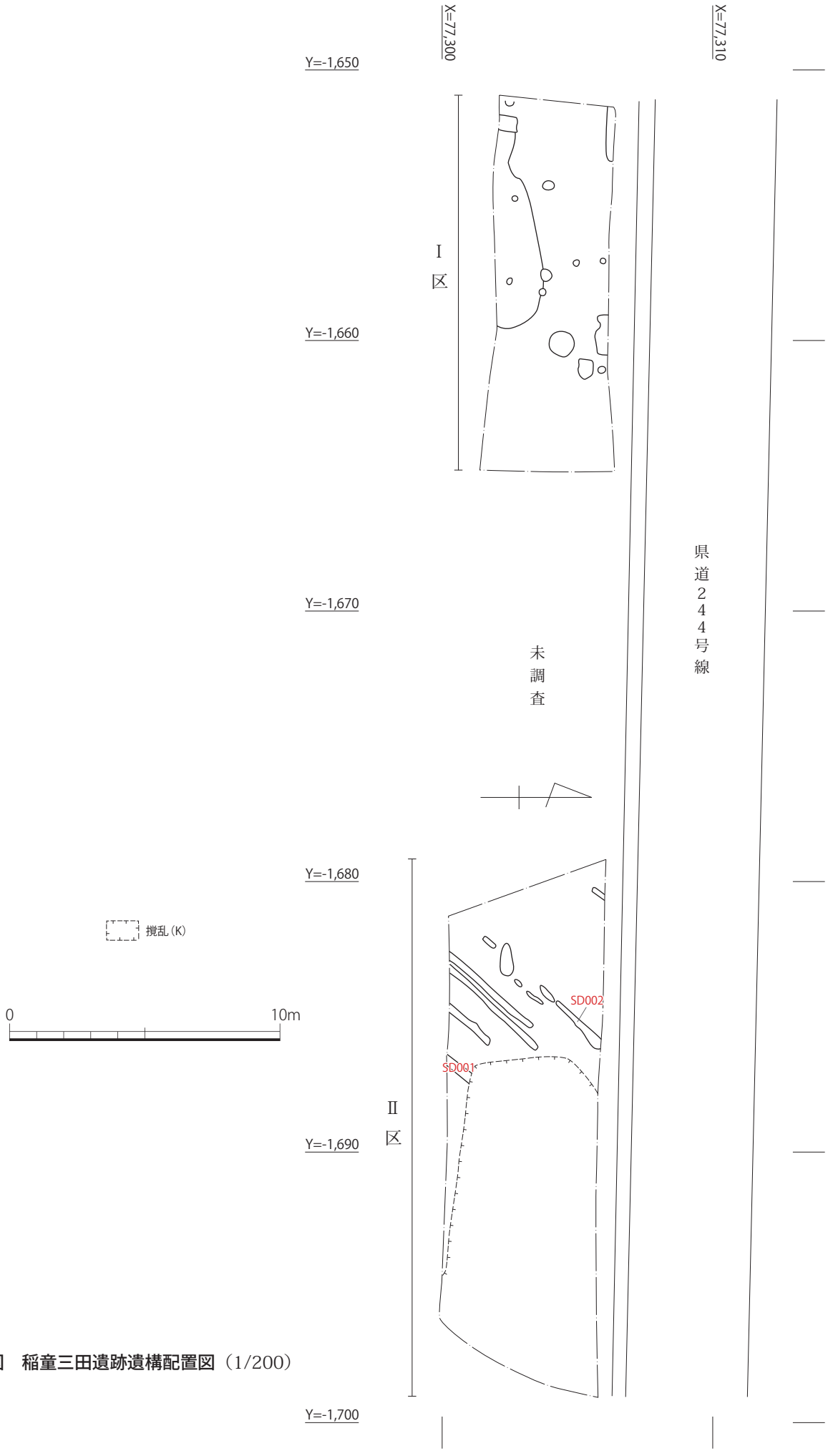
調査前（西から）

表土剥ぎ

Ⅰ区調査風景

Ⅱ区調査風景

**第４図　発掘調査の様子**




**第 5 図　稲童三田遺跡遺構配置図**（1/200）

**SD001**（第５図、図版３・４）

Ⅱ区の西側で検出した。溝の北側は撹乱抗に切られており、南側は調査区外へと続く。埋土より土師質土器の小片が出土した。

**土師質土器**　１は焙烙。口縁部の小片である。ヨコナデ成形で仕上げており、口縁部と底部の境には稜線が入る。底部の外側には煤が全面に付着する。胎土は比較的しまっており、表面には細かい雲母片を観察できる。残高 3.1cm。近世～近代の所産。

**SD002**（第５図、図版３・４）

Ⅱ区の西側で検出した。溝の北側は調査区外へと続いており、南側は浅くなり途切れている。埋土より陶器の小片が出土した。

**陶器**　２は器種不明。胴部の小片と考えられる。土師質を呈すが、よく焼き締められておりここでは陶器として報告する。残高 6.1cm。近世～近代の所産か。

**（２）採集遺物**

本調査ではパンケース１箱分の遺物を発見したが、ほとんどが表面採集遺物である。以下、復元図示できたものを報告する（第６図、図版４、表１）。

**土師質土器**　３は焙烙。口縁部の小片である。ヨコナデ成形で仕上げており、口縁部と底部の境に稜線が入る。底部の外側には煤が付着する。残高 3.2cm。近世～近代の所産と考えられる。Ⅰ区にて採集。

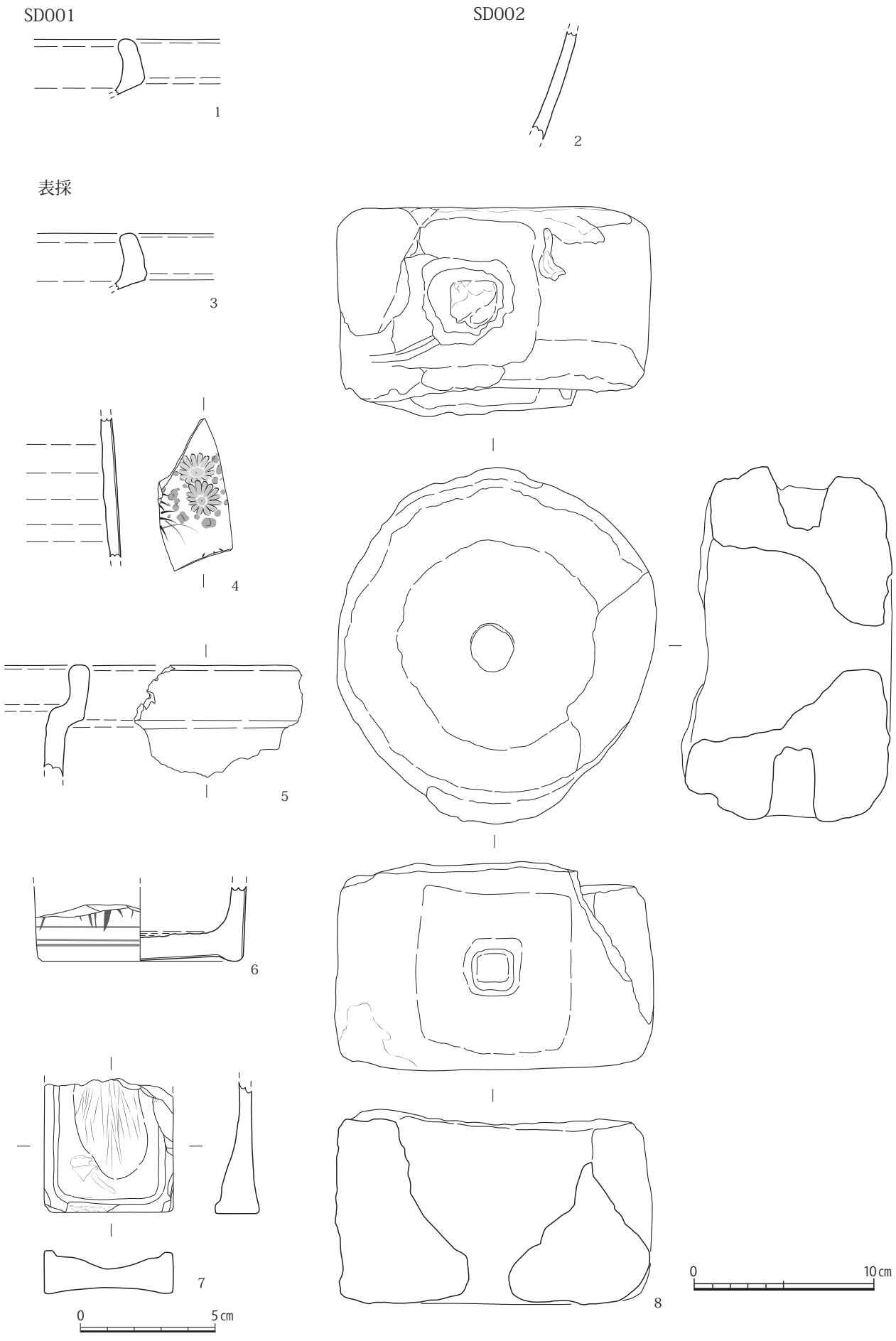
**陶器**　４は瓶。胴部の小片である。ロクロナデ成形で、外面に草花文様（菊花）を色絵付けし、薄い白濁釉をかけて仕上げる。残高 7.9cm。近世～近代の所産か。Ⅰ区採集。５は土管。一方の端部の破片である。胎土は数 mm の砂礫を多く含み粗い。灰褐色の釉薬をかけて仕上げている。近代の所産と考えられる。Ⅱ区にて採集。

**染付**　６は瓶。底部片で、復元底径 11.6cm、残高 4.2cm を測る。外面には白化粧土を施し、草花と思しき文様をコバルトで絵付けし、透明釉をかけて仕上げる。畳付は露胎となる。近世～近代の所産と考えられる。Ⅱ区にて採集。

**石製品**　７は硯。２分の１程度の破片である。使用痕を多く残す。石材の色調が赤褐色を呈すことから赤間石を用いたものではないかと考える。近世～近代の所産か。Ⅱ区にて採集。８は石臼。幅 20cm 程度と比較的小型であることから、茶臼と考えられる。側面には把手を装着するほぞ穴が２ヶ所抉られている。近世～近代の所産。Ⅱ区にて採集。

| 番号 | 出土遺構 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | 調整 | 焼成 | 胎土 | 色調 | 残存 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SD001 | 土師質土器 | 焙烙 | 残高3.1 | 内:ヨコナデ<br>外:ヨコナデ | 良好 | 微細～1mmの粗砂・雲母を多く含む | 内外:橙7.5YR 6/6 | 口縁部片 | 底部に煤が付着 |
| 2 | SD002 | 陶器 | 不明 | 残高6.1 | 内:ヨコナデ<br>外:ヨコナデ | 良好 | 微細～2mmの白色粗紗を含む | 内:浅黄橙7.5YR 8/4<br>外:浅黄橙7.5YR 8/3 | 胴部片 | |
| 3 | 表採 | 土師質土器 | 焙烙 | 残高3.2 | 内:ヨコナデ<br>外:ヨコナデ | 良好 | 微細～1mmの粗砂・雲母を多く含む | 内外:橙5YR 6/6 | 口縁部片 | 底部に煤が付着<br>Ⅰ区採集 |
| 4 | 表採 | 陶器 | 瓶 | 残高7.9 | 内:ロクロナデ<br>外:ロクロナデ→色絵付け→施釉 | 良好 | 精良 | 素地:にぶい黄橙10YR 7/3<br>釉:明褐灰7.5YR 7/1 | 胴部片 | Ⅰ区採集 |
| 5 | 表採 | 陶器 | 土管 | 残長6.3<br>残存幅9.5 | 内:ヨコナデ→施釉<br>外:ヨコナデ→施釉 | 良好 | 微細～7.5mmの中礫を多く含む | 素地:にぶい橙7.5YR 6/4<br>釉:灰褐5YR 4/2 | 端部片 | Ⅱ区採集 |
| 6 | 表採 | 染付 | 瓶 | 復元底径11.6<br>残高4.2 | 内:ロクロナデ<br>外:ロクロナデ→絵付け→施釉 | 良好 | 精良 | 素地:灰白2.5Y 8/2<br>釉:灰白7.5Y 8/1 | 底部片 | Ⅱ区採集 |
| 7 | 表採 | 石製品 | 硯 | 残長5.0<br>幅4.8<br>厚1.6 | ― | ― | 赤間石？ | 灰赤2.5YR 4/2 | 1/2程度 | Ⅱ区採集 |
| 8 | 表採 | 石製品 | 石臼 | 幅20.1<br>高さ11.6<br>重量3,850ｇ | ― | ― | 凝灰岩 | 灰白5YR 7/1,橙7.5YR 6/6 | 一部欠損 | 茶臼か<br>Ⅱ区採集 |

**表１　稲童三田遺跡出土遺物観察表**




**第６図　稲童三田遺跡出土遺物実測図**（1/3・1/2）

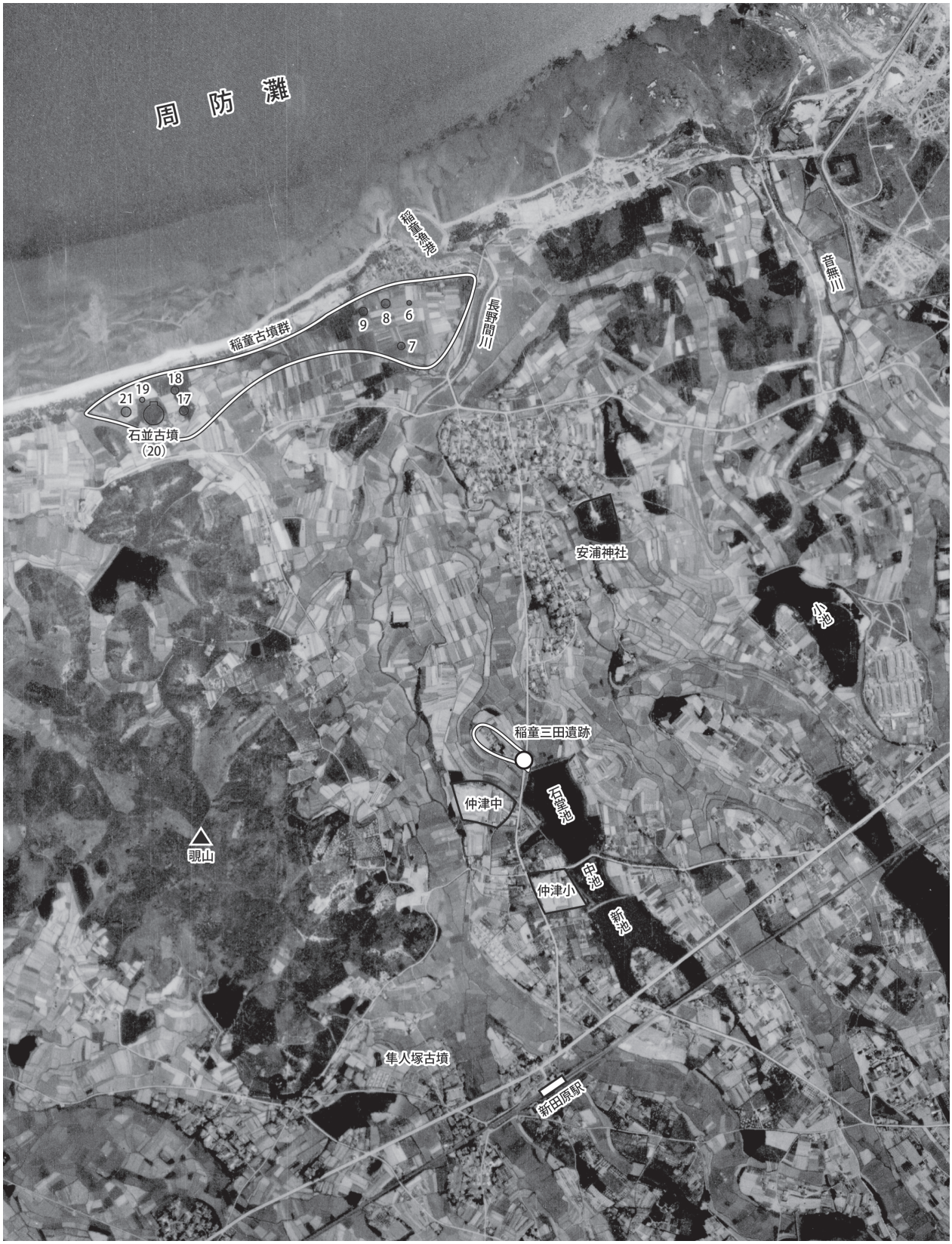
# 第4章　結　語

以上、稲童三田遺跡の発掘調査成果を報告してきた。調査面積が狭小で遺構密度も低かったことから遺跡の様相を考察するには十分ではないが、最後に結語として遺跡の総括を行い、今回検討できなかった課題等を提起したい。

稲童三田遺跡の今回の調査では小さな土坑、柱穴、溝と複数の遺構を確認した。遺物を伴った遺構は僅かに２条の溝のみであったが､遺物の帰属時期より稲童三田遺跡は近世以降の遺跡であることが分かった。今回の調査地点は、周辺の地形を観察すると微高地が谷に向かって南西へ降っていく縁辺部に立地することが分かる。したがって稲童三田遺跡の生活域の中心は、今回の調査区から北東側に広がる微高地上に展開する事が予測されよう。

稲童三田遺跡の位置する行橋市稲童地区は、後期旧石器の製作遺跡である渡築紫遺跡や金銅立飾付眉庇付冑に代表される豊富な甲冑群を保有する稲童古墳群など先史以来多くの遺跡が営まれてきたが、その近世頃の様子については僅かに残る古文書等にのみ知ることができた。具体的な例を示すと、集落の中心は稲童三田遺跡より東 700 mに位置する安浦神社付近であり、元和年間の「人畜改帳」には家数 57、人数 116 と記録されている（平凡社刊『福岡県の地名』)。今回の調査成果は、その様相を具体的に示すものではないが、限られた文献史料を補完する意味で考古学的調査が果たす役割は大きく、今後の地域史解明のためにも周辺の調査事例の蓄積を待ちたい。

# 図　版




稲童三田遺跡の位置（上が東）

## 図版２　　稲童三田遺跡

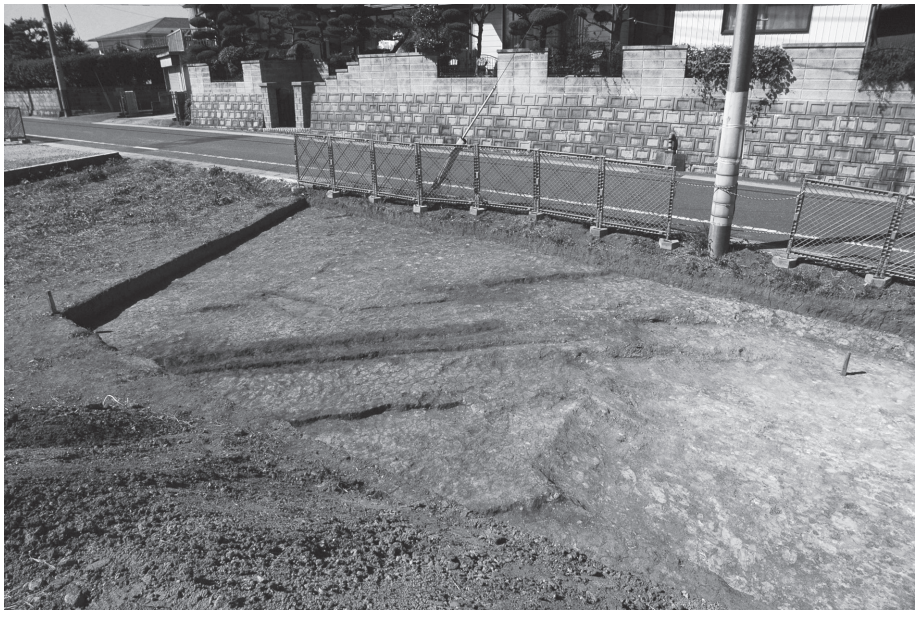
１．Ｉ区全景（西から）

２．Ｉ区全景（東から）

３．Ｉ区南側（北東から）

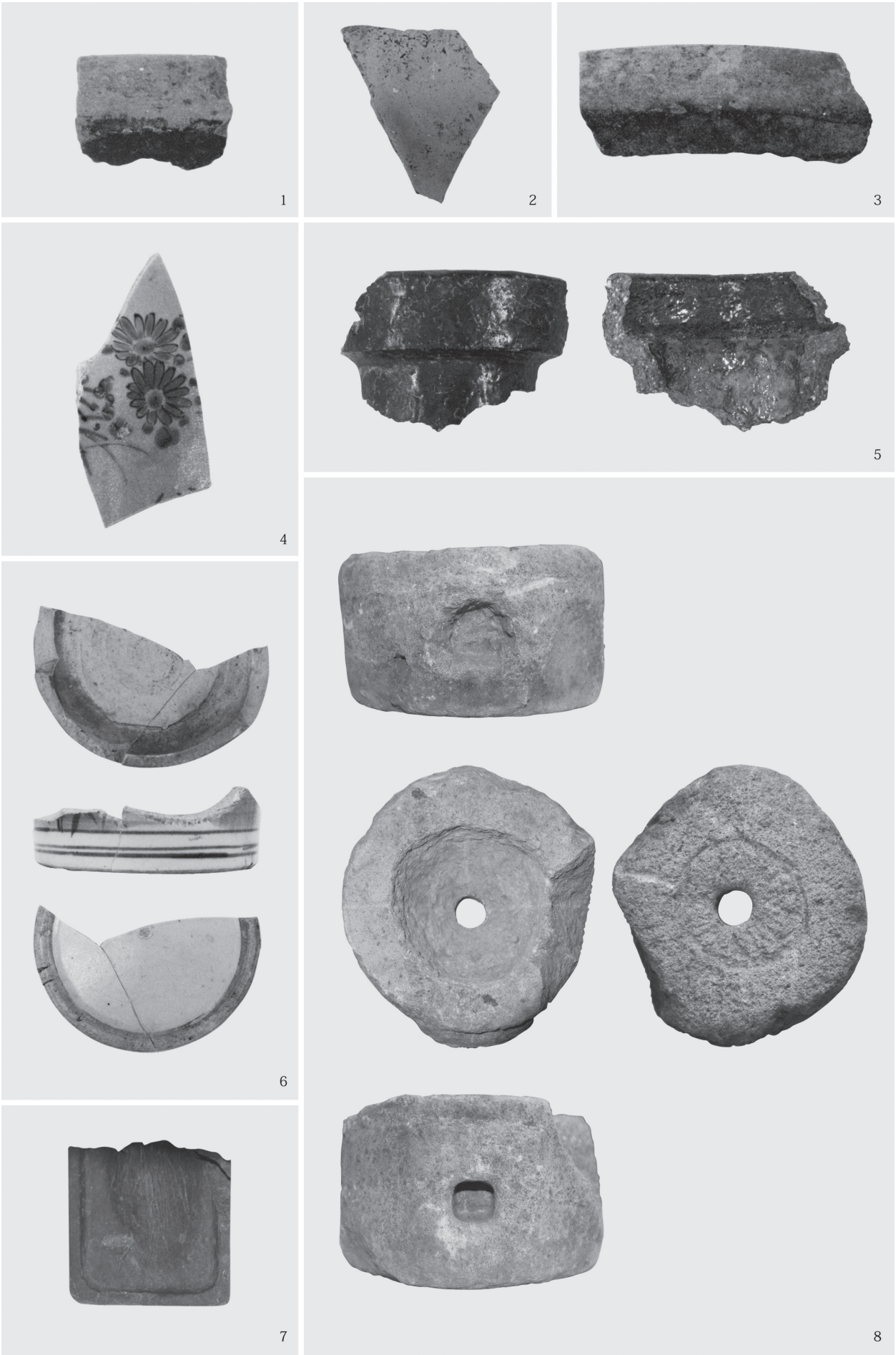
１．Ⅰ区東側（西から）

２．Ⅱ区全景（西から）



３．Ⅱ区西側(南東から)

## 図版４　稲童三田遺跡




稲童三田遺跡出土遺物

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふりがな | いなどうみたいせき |
| 書名 | 稲童三田遺跡 |
| 副書名 | 県道稲童新田原停車場線関係埋蔵文化財発掘調査報告 1 |
| シリーズ名 | 行橋市文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第 56 集 |
| 編著者名 | 山口裕平 |
| 編集機関 | 行橋市教育委員会 |
| 所在地 | 〒 824-8601　福岡県行橋市中央一丁目 1 番 1 号　TEL 0930-25-1111　FAX 0930-25-1582 |
| 発行年月日 | 2015 年 3 月 31 日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 発掘期間 | 発掘面積 | 発掘原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| いなどうみたいせき<br>稲童三田遺跡 | 福岡県行橋市<br>大字稲童 3061-2<br>3063-5 番地 | 402133 | 14049051 | 33°<br>69′<br>70″ | 131°<br>01′<br>80″ | 20130823<br>～<br>20131003 | 250㎡ | 県道歩道<br>設置工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 稲童三田遺跡 | 散布地 | 近世・近代 | 土坑、溝、柱穴 | 陶磁器、硯、石臼 | |

| | |
|---|---|
| 要約 | 京都平野の東部、覗山南の標高 14m 前後の海岸段丘に立地する。<br>調査地点は近世以降の散布地で、遺跡の中心は北東側に広がる微高地上にあると考えられる。 |

2015年（平成 27 年）3月31日　発行

# 稲童三田遺跡

行橋市文化財調査報告書 第５６集
著作権所有　福岡県行橋市中央一丁目１番１号
発　行　　行橋市教育委員会

印　刷　　福岡県行橋市南大橋三丁目 15 番 19 号
京築印刷株式会社